

童話化された昔話

— 坪田譲治の『新百選日本むかしばなし』 —

藤井 倫明

一、はじめに

現在では伝統的な語りで昔話に触れたというひとは少なくなり、ほとんどが書籍などによって昔話を知っている。昔話は近代以降、「聴くもの」から「読むもの」に変わったとも言える。

現代における昔話への認識を知るためには、再構成された作品を知る必要がある。また、多くのひとが最初に昔話に触れるのは絵本や児童向けの昔話集などであり、とりわけ児童向けの文学作品（童話）として再構成された昔話の考察が重要であると考えられる。

昔話を童話化した人物のひとりとして本論では坪田譲治を取り上げる。

坪田譲治は、大正～昭和前期における代表的な児童文学作家である。また、後進の作家を数多く育てたことでも知られる。日本の児童文学の歩みを論じるうえで欠かすことのできない人

物のひとりと言える。

また、創作童話だけではなく、昔話の童話化にも力を入れた作家である。その作品は、なんども形を変えて出版され、現代に至るまで幅広い層に読まれている。育てた作家の中には、松谷みよ子・寺村輝夫など昔話の童話化作品を多く残している作家がいる。以上のことより、近現代における童話化され昔話を論じるうえで、坪田譲治は極めて重要な作家であると考えられる。

坪田の作品に関する研究は多く存在するが、坪田の童話化昔話に着目した研究は確認したかぎりない。そのため、坪田の童話化昔話研究を行うにおいて基礎となるデータは著しく不足している。

今回は、今後の坪田の童話化昔話研究の基礎となるデータをとりとまとめること、およびそのデータの分析を試み、今後の研究の第一歩とすることを目的とする。

坪田の童話化昔話集において、中期の集大成とも言えるもの

が『新百選日本むかしばなし』（一九五七（昭和三十二）年八月新潮社）である（以下『新百選』）。坪田の童話化昔話集においてもっとも整っていると考え、後の『坪田讓治全集十一』（一九七七（昭和五十二）年六月 新潮社）も『新百選』を中心に編纂されている。そのため、今回は『新百選』を題材として利用する。

本論に入る前に、基本的な事項を確認する。

再構成の定義

・文字によって書かれていること。

昔話は口承であるために、本来は文字には残らない。文字に残すことによって、口承文芸から書かれた文芸に変化しているということが第一条件になる。

・「特定の人物（再構成者）」によってなんらかの手を加えられていることが明白であること。

書き手自身がアレンジを加えたと明言しているものはもちろんのこと、現存する昔話資料などと比較して、書き手がなんらかの手を加えたことが明らかであれば、それを再構成とする。（逆に言えば、語り手の話をそのまま筆記した記録は再構成としない。）

なお、一般的に書き直した昔話は再話とすることが多いが、再構成の中でも語り手の記録を現代語に直したものとアレ

ジが少ない物を便宜上再話として定義する。

童話化の定義

・読者（自分で読む及び読み聞かせて聞かせてもらう）の対象として児童を想定していること。どこまでの年齢層を児童とするかはさまざまな見方があるが、今回は目安として現在の小学生くらいの年齢まで（満十二歳前後）を目安として考える。

なお、本稿では「児童向けの文学作品」を児童文学ではなく童話と称する。童話は児童向けの文学作品という意味に加え「昔話」と同意義も包括して使用されることもある（「グリム童話」など）が、坪田讓治本人が自身の児童向け文学作品を「童話」と称し、また昔話を童話として書き直したとも明言しているため、この語を用いることとする。

坪田讓治略歴

小説家、童話作家。一八九〇（明治二十三）年岡山県に生まれる。

一九〇八（明治四一）年に早稲田大学文科予科に入学。在学中小川未明に師事する。一九二五年に一九二六年『正太の馬』を出版。同年『赤い鳥』に最初の童話『河童の話』を発表。その後『赤い鳥』に四十篇あまりの作品を発表する。一九三九年翌年新潮社文芸賞を受賞。一九五四年に『坪田讓治全集』全八

巻が刊行され、この全集で翌年に芸術院賞を受賞。一九五一年に童話の研究・創作の集まりとして『びわの実会』を創立する。一九六三年には雑誌『びわの実学校』を創刊。これらによつて後進の童話作家を多く育てる。

一九八二（昭和五十七）年七月死去。九十二歳。

二、坪田の昔話童話化に対する考え方

『新百選』はその書名の通り、百話の作品を収録している。（収録作品の詳細は論末の表を参照）。そして、その百話を話型別に分類している。

坪田は『新百選』の前書きで以下のように語っている。

〈引用一〉

昔話の方は、江刺郡昔話以来、本職の童話がおろそかになるくらい、読んだり書いたりしました。一時は、彼は童話が書けないもので、昔話に逃避したのだと言う人がありました。しかし今、こうして、私の昔話を百編まとめて本にすることが出来るというのは、たとえようのない喜びであります。喜びではありませんが、百パーセントの喜びではありません。それというのも、わが国の昔話には、二つの源があります。昔の本から取り出して来るやり方と、遠い田舎の辺鄙な村のとしよりから聞き出して来る方法とであります。私が魅力にと

りつかれた江刺郡昔話というのは、この後者なのであります。今、わが国の昔話は、その八、九分通りは採集しつくされたと思いますが、その功績は柳田国男先生と、その一門の方々の努力によるものであります。そして、私などは、その努力に寄生し、これを無断で借用し、このような本をつくったという次第であります。無遠慮に喜ぶわけには行きません。ここに謹んで、柳田国男、佐々木喜善、関敬吾その他、沢山の日本の昔話を採集された方々に、厚く御礼を申し上げます。

ここに書かれているように一時期は童話よりも昔話の童話化が作家活動の中心だった。⁽²⁾

坪田が昔話の童話化を行った動機として、最初の昔話集『鶴の恩がへし 日本昔話その二』で以下のように述べている。

〈引用二〉

私たち幼い時、母の寝ものがたりの、昔ばなしを聞いて育ちました。それは、舌切雀であり、カチク山であり、狐や狸が人をばかした話であり、また、鶴や亀が恩をかへした話などがありました。まだ、ガスも電燈も水道もない時代で、いつ迄も話をねだつてゐると、

「それ、鐘つき堂の鐘が鳴り出した。算へてごらん。一つ、二つ、—もう九時だからね。さあ、ねませう、ねませう。」
そんなことを、母に言はれたものであります。然し思ひ出し

て見れば、何と、その頃の仕合せに思へることでありませう。今頃の我国の子供で、母から、私たちのやうに昔ばなしを聞かされてゐる仕合せもありません。もつともそれは時局のせいもあります。昔ばなしを聞かせるやうな心持に、今頃の母はなりかねてゐるのであります。然しまた一方から考へれば、今頃のお母さんたちは、昔ばなしを知つてゐないのであります。それを聞くやうな仕合せな育ち方をしなかつたのであります。

明治の末頃から大正にかけて、子ども読みのものの中にも、西洋のものが非常に沢山入つて来ました。そして昔から言ひ伝へられてゐた昔ばなしが、次第に話されなくなつて行つたのであります。二百も三百もある我国の美しい玉のやうな話で、今の子供たちが知つてゐるのはどのような話でありませう。恐らく五つか六つくらゐなものであります。そのかはり彼等はアンデルセンの話を知つてをります。またアラビヤ夜話、クオレ、イソップ、その他現代人の新作童話なども沢山読んでをります。これには子供のための雑誌が善悪ともに大いに作用したと思はれますが、とにかく、このやうにして我国の昔ばなしは母も知らず、子も知らず、孫もまた知るよしによしな有様とならおうとしてをります。実に何とも嘆かましい次第であります。

思ふに、永い歴史をもち、すぐれた文化をもち、強い国力をもつ国家は、昔から伝承されてゐる子供のための立派なお話

を持つてゐないでせうか。そのお話によつて、次々と正しい子供、良い子供、強い子供を育ててゐるのではないでせうか。つまりドイツにグリム童話があるやうにであります。

我国にも明治以来、この伝承文学を文字に書き調べたものが沢山出版されてをります。巖谷小波のものがあり、石井研堂のものがあり、楠山正雄、柳田国男両先生のものもあります。他にはまだ私のしらないものが沢山あることと思ひます。だから誰でも子供たちのために読んでやり、或ひは話してやらうと思へば、決してその便のない訳ではありません。それが何故か西洋のそのやうに我国の子供たちに今迄は読まれなかつたのであります。

で、私はここにこの昔ばなしの本を出し、子供たちには読んで貰ひ、お母さんたちには話して貰はうと思ふのであります。然し柳田国男先生のものがあり、楠山正雄先生のものがあるのに――と、実は私とても考へたのであります。ただこの本は国民学校三年生程度の文章にしてをります。それが特色と言へば特色であります。つまり昔ばなしは幼年時代に喜ばれ、またその時代にこそ與へるべきものと考へられるからであります。

ところで、終に本当に深い感謝の念を以て、ここに書きしるしておかなければならないことがあります。実は、この本の三十話ばかりの中、その半分は柳田先生の『日本昔話』中より戴いたものであります。名作をただ幼年向きに書き直した

ばかりで、心中誠に申訳ない気がするのであります。然し先生は、

「昔話はお国のものだから、遠慮しなくていい。」

と仰言られ、私がかうしてこの本をこの本を出すことを許されたばかりでなく、他にも昔ばなしの参考書数冊と、古い得難い雑誌二十幾冊とを與へられたのであります。先生の『日本昔話』中のもの以外は、またその先生から戴いた本の中からとつて書き直したものであります。(後略)

(「鶴の恩がへし 日本昔話その二」「あとがき」)

このことからわかるように、坪田は昔話の童話化に並々ならぬ情熱を注いでいたようである。童話化の目的は昔話を現在の児童に伝えるためとしているものの、昔話そのままを伝えるのではなく、自らの手で童話として再構成することを重視していたことがわかる。

『新百選』の編纂にも協力した大川悦生⁽³⁾は『新百選』の解説で以下のように述べているが、それもこのことを裏付けていると考えられる。

〈引用三〉

昔話はすべての話がすぐれているでしょうか？ どれもこれも完璧なものでしょうか？ いや、その中には卑俗なものや、下品なもの、残酷さわるものなど、不純な要素がごっちゃ

にまじっています。盲目的に昔話を礼賛するのは、まちがいです。わたしたちは、そういう不純なものを取り去って、典型としてのよりよい形で、次代に伝えなければなりません。その意味からして、ごく部分的には不純なところを削除または修正することも必要になってきます。この点でも坪田譲治昔話は、細心の注意を払い、各地の採取資料の中から、もっとも適切な話をえらぶことに苦心しています。

また、これらの記述から以下のことも言える。

- ・ 柳田国男をはじめとした近代以降の収集・研究に大きな影響を受けていたということ。
- ・ 坪田自身は昔話に「聴く」のではなく主に「読む」ことで接していたということ。
- ・ 坪田が参考にした原典とも言える資料が存在するということ。

これらのことから坪田には昔話の採取を行うという考えはなかったということがわかる。

なお、幼少期に母親が昔話を語っていたともあるが、伝統的な語りではなく『カチカチ山』などの有名なものを適当に語っていたという記述もあり、坪田が童話化した昔話は郷里である岡山県のもの⁽⁴⁾は少ない。幼少期の聞き語りは、資料の収集にはあまり影響していない可能性が高いと思われる。ただ、昔話を

童話化するということを思い立った動機として、幼少期の語りを聞いた思いが影響を与えている可能性は否定できない。

関敬吾は新聞の書評で以下のように『新百選』を評している。

〈引用四〉

しかし、筆者はこの本の紹介者としては決して適役ではない。坪田さんと筆者とは昔話に対する態度が全く異なるからである。筆者は昔話をありのままの姿において、その中に過去の何物かを捕えようとし、あるいは昔話を通じて、これを伝承する庶民の生活態度を知ろうとすることに大きな関心をもち、これを分析的に見ようとするからである。しかし、坪田さんにとっては、昔話は単なる素材であり、再話を目的とし、昔話を文学としてとらえようとすることにあると思われる。たとえば、この本のなかに「金七孫七」という話があるが、そのもとになった前記の江刺郡昔話の採集された話とくらべると、坪田さんの話では約三倍の長さになっている。ということとは、三分の二は坪田さんの創意に基づく挿入である。この意味において、再話というよりはむしろ創作に近い。この本は日本むかしばなしとなっているが、あくまで坪田さん個人の創作であり、この意味においてこそこの本は価値がある。したがって日本の昔話というよりは坪田童話と呼ぶべきものであり、この本は坪田さんのこれまでの小説や童話とならべて坪田文学として高く評価されるべきであろう。しかし

私は文学について素人であり、価値判断をする能力はないが、この本を一読して、著者はお孫さんを前において、昔話を語られるような昔話の雰囲気をも十分に描き出されていることを感ずる。
〔読売新聞〕一九五七年九月二十五日

このように、関敬吾は『新百選』ひいては坪田の童話化昔話にあまり好意を持っていなかったのではないかと思われる。関のような研究者は口承で伝えられた昔話をできるだけそのまま伝えること重視していたため、童話の題材として昔話を利用する坪田のやり方には賛成できなかったのではないだろうか。

三、『新百選日本むかしばなし』の収録作品

『新百選』は、それ以前に刊行した昔話集からの再録が約半分にしめる。そのため、まずは『新百選』以前の坪田による童話化昔話集を確認する。

①『鶴の恩がへし 日本昔話その一』(以下、『鶴の恩返し』)

一九四三(昭和十八)年七月 新潮社

坪田にとつて初となる童話化昔話集で、二十六話の作品を収録する。

②『歌のじょうずなカメ 日本昔話その二』(以下、『歌のじょ

うずなカメ』一九四七（昭和二十二）年十一月 新潮社
第二の昔話集で、二十話の作品を収録する。

③ 文庫版『鶴の恩返し』一九五二（昭和二十七）年五月 新潮社

①より十五話、②より十二話、新たな書き下ろしとして「桃太郎」を加えた全二十八話を収録する。

④ 『世界少年少女文学全集二十八（日本編一） 日本童話集』（以下、『日本童話集』）一九五四（昭和二十九）年八月 創元社

①と②の全話および「桃太郎」に新たな書き下ろし二十七話を加えた全七十四話を収録する。

⑤ 『坪田譲治全集 第八巻 昔ばなし・幼年童話集』一九五四（昭和二十九）年十二月 新潮社

①・②の全話および「桃太郎」と④で書き下ろされたうち五話を収録する。

以上が『新百選』以前の坪田の童話化昔話集である。

⑤収録の五十二話に加え、新たな書下ろし作品四十八話を加えたものが『新百選』の内訳となる。

なお、④には「貧乏神」「壁にかいたつる」という作品が収録されている。それぞれ『新百選』の「びんぼう神」「かべのつる」

とタイトルが似ており、後の『坪田譲治全集十一』では④からの採録であるとしている。しかし、「貧乏神」は火を焚いて貧乏神を追い出す話であるのに対し、「びんぼう神」は貧乏神から教えられた馬を叩いて金持ちになる方法を試みる話であり、全く別の昔話が元である。「壁にかいたつる」と「かべのつる」は話の展開は同一であるが主人公の名前や各描写の違いなどが見られ、別作品（「壁にかいたつる」のリメイク（書き直し）作品が「かべのつる」と見なすべきと考ええる。

『新百選』ではその章の最初に、それぞれの昔話ほどの県で採集されたものをもとにしたのかということを基本的には明記している。例をあげる（以下、引用傍線は論者による）。

〈引用五〉

（前略）『親切なおじいさん』（岩手）『お地藏様』（東北）『木仏長者』（岩手）『わらしべ長者』（広島）をみるとこのことがよくわかります。（中略）『かべのツル』（大分）は中国風な仙人に術を思わせる話です。『人が見たらカエルになれ』（山梨）は笑話に近く、『権兵衛とカモ』『沢右衛門どんのウナギつり』（熊本）は、ほら話のひとつです。（『新百選』「さずかった宝、にげた宝」）

ただ、全ての話に原典の採話地が明記されているわけではない。例えば、傍線部の『権兵衛とカモ』『沢右衛門どんのウナギ

つり」(熊本) ようにタイトルが並んだあとに採話地を記したものは、「この二タイトルが両方とも同じ採話地」という意味では必ずしもなく、後のタイトルのみ有効であるパターンも見られる。先の例では『沢右衛門どんのウナギつり』は熊本県が採話地であるが『権兵衛とカモ』は福島県が採話地となる。やや不親切な表記法であると言える。採話地の明記の基準は不明である。また、基本は近代以降の県を基準としているが例外もあり、『お地藏様』(東北)のように漠然としたくくりで示されているものもある。

全ての採話地が明記されているわけではないものの『日本昔話集成』(以下、『集成』)などを利用し当時の文献をたどり、『新百選』の作品と元の昔話を比較することにより、坪田が原典として参考にしたと考えられる資料をだいたい特定することが可能となる。これらの作業を経て、確認できた採話地に関しては論末表を参照のこと。

採話地は全体的に偏りが見え、東北地方と九州沖縄地方が全体の七割以上を占める。また東北の中では岩手県、九州の中では鹿児島県の島嶼部がとくに多い。また、関東地方の昔話はひとつもない。

創作年代順に見ると、東北地方のものは①②など『新百選』以前からも多く書かれている。一方九州地方のものは②から増え始め、『新百選』の書下ろしで大幅に増えていることが確認できる。

次に坪田が使用したと思われる資料を確認する。とくに『聴耳草紙』『日本昔話(上)』から多く採られていることが確認できる。東北地方・九州沖縄地方以外のものは新潟県を除けばほとんどが柳田の『日本昔話(上)』と雑誌『昔話研究』を参考にしている。また、関敬吾の『日本昔話集成』の典型話と同じ型のもものは、原資料ではなく『集成』を参考にした可能性が高いと思われる。このように、使用した資料そのものは非常に少ないということが確認できる。このことが採話地の片寄りの原因と考えられる。

坪田が昔話の童話化をはじめた戦前期はまだ昔話の採取は黎明期であり資料自体が少なく、『新百選』の頃でも、研究者でなければ閲覧の難しい資料も多く、資料や採話地が偏るのもある程度は仕方がない側面もあるが、坪田はあまり新しい資料の発掘に熱心ではなかったと言えるのではないだろうか。

四、『新百選日本むかしばなし』と『日本昔話集成』

坪田が『新百選』を作る時期に、当時の昔話研究の集大成とも言える書籍が編纂された。関敬吾による『日本昔話集成』である。『集成』は①②が刊行された後の一九五三年から刊行が始まり、『新百選』が出た時期には第五卷『本格昔話三』までが出ていた。坪田も昔話を調べる際には『集成』を使用することが多いと述べている。⁵⁾

『集成』が出る前の①②と、ある程度出そろった『新百選』の書下ろしを比較すると、①②では、『集成』の典型話と原典が同じと思われるものはほとんどないのに対し、『新百選』の書き下ろしは約三分の一以上（二十一話）が典型話と同じとなる。

これは偶然とは考えにくく、『新百選』において新たに書き下ろす昔話を選定する際に、『集成』を参考にしていただいた可能性は高いと思われる。『集成』の典型話を原典として使用したと考えられる例も存在するが、多くは「聴耳草紙」などすでに使用している資料と同一の内容であるため、すでに持っている資料の中からどの昔話を選ぶかの参考として使用する例が多かったと考えられる。「系統立てた選び方」をするために『集成』を活用したのではないだろうか。

また、『新百選』の章立ても『集成』をある程度参考にしていただくと考えられる。

「ふしぎな子どもたち」（『集成』・本格昔話「誕生」、などがそれである。「恩をかえした動物たち」（『集成』「動物報恩譚」）、「キツネものがたり」（『集成』「人と狐」）などを動物昔話と分けて章立てしているなど『集成』の影響を見ることができると思われる。

しかし、「鬼と山姥と山の神と」「さすかった宝、にげた宝」など、『集成』に対応していない章がある、『集成』では「呪宝」に分類されている「ヒョウタンから出た金七孫七」（『集成』「宝瓢」）が『新百選』では「ふしぎな子どもたち」の章にあるなど

完全に『集成』の分類に従っているわけではない。また、兄弟ではなく仲の良い友達同士が主人公の話を「兄弟ものがたり」に入れているなど、厳密に分類を意識しているとは言い難い。

坪田は学術的な研究成果をある程度は取り入れながらも、それに縛られずに比較的自由に創作していたと言えるのではないだろうか。

なお、昔話を収集・分類した当時の文献として、柳田国男『日本昔話名彙報』（以下「名彙」）が存在する。当時の昔話研究において重要な文献であるが、『新百選』で『名彙』の典型話と同じものは非常に少ないなど、坪田は『集成』ほど『名彙』は重視しなかったようである。

五、『新百選』の選考基準

『新百選』の大川悦生による解説では以下のように述べられている。

〈引用六〉

ただし、新百選の意味は学問的に見た百の主要な昔話という意味ではありません。あくまで文学者である先生の好みに従って選ばれた、百のすぐれた昔話です。（『新百選』「解説」）

しかし、好みとは言っても『新百選』の前書きでは「系統立

てた選び方をした」と述べており、ある程度は選考基準のようなものがあつたのではないかと考えられる。坪田はどのような考えに従つて童話を書いているのかというのを以下のように語っている。

〈引用七〉

なぜならおとなの文学における人生の陰の部分の描写は、他の光の部分光彩あらしめんがためのもので、つまり光を求める欲求としての陰であるが、童話においては、すなわち子供に対してはそういう手の込んだことは理解の限度を超えた表現になつてくるからである。それは子供に対してとてい望み得ない。そこで子供には端的に人生の光の部分を示し、常に輝く希望を持たせることが童話作家の常々心得ておかなければならぬことになるのである。

（坪田譲治『新修児童文学論』）

これは、引用にある大川の記述とも符合すると思われる。

坪田が昔話を童話化する際、自身の童話論を念頭に置いて原話を選んだ可能性が考えられるのではないだろうか。

以上の事も考慮して『新百選』所収の話を確認すると、いくつかの特徴が確認でき、それが坪田の選考基準ではないかと思われる。

まず、分類に合う話をできるだけ均等に選考していたのでは

ないかということが考えられる。

先述のように『新百選』の章は『集成』をある程度参考にしています。各章の話はだいたい十話前後となつており、そこまですべて厳密ではなかったものの各章がある程度均等化するように書下ろしの話を選考した可能性が考えられる。

次に、できるだけ古い型の昔話を選考していたのではないかと考えられる。

「舌切り雀」「花咲か爺」などのお馴染みといえるものがない。とくに「花咲か爺」は『日本童話集』で「花咲かじい」として書かれたにも関わらず省かれている。

話型に近い「灰まきじいさん（雁取爺）」「スズメのヒョウタン（腰折雀）」が存在するため「舌切り雀」「花咲か爺」は収録を見送った可能性も考えられる。当時の昔話研究の学説を鑑み、同系統の昔話ではできるだけ古い型に近いと考えられるものを選んでいただとも考えられる。ただし、この例は少ない。

次に、比較的知られていないものを多く選考していたのではないかと考えられる。

全国的に分布している「蛇婿入り」や比較的よく知られた昔話である「屁ひり女房」、厳密には伝説であるが昔話とされることの多い「浦島太郎」などが収録されていない。逆に「竹の子童子」など一部地域にしか見られない非常に珍しいものも多く収録されている。百話もの話を選べばよく知られていないものが多くなるのは当然であるが、有名なものをあえて外している

こと、比較的有名な話は『新百選』以前のものが多くことから、あまり知られていないものを優先して選ぶという考えがあった可能性は高いのではないだろうか。

次に怖い話は少ないということが挙げられる。化け物が出てくるような話は少なく、怪談の類は一切ない。また、鬼や山姥が出てくる話も大抵これらが退治されて終わっている。基本的に怖い話は避けるという考えがあったことが考えられる。児童に恐怖を与える話は選択しなかったと考えられる。

次に継子いじめ譚がないということが挙げられる。

継子いじめ譚は、『集成』でも一章を取る大きなカテゴリーであり、全国的に分布例も多い。それにも関わらず一話もないということは、継子いじめ譚は児童に陰を見せるものとして選択しなかった可能性が考えられる。なお後年は「灰坊太郎」などの継子いじめ譚も童話化している。

次に下品な話はほとんどないということが挙げられる。

とくに笑話に多い排出物や性にかかわる話は徹底的に避けている。これは坪田が排出物や性に関わる話を品のない物と考え排除しようとした結果と考えられる。なお、『新百選』は笑話に分類される話は少ない。これは、当時はまだ『集成』『笑話』の巻が発行されていなかったためということも大きいのではないだろうか。⁶⁾

次に子供が死ぬ話はないということが挙げられる。

坪田の小説と童話の境として、「子供の死」というのをあげら

れる。坪田は小説においては子供の死を多く描くが、童話では子供の死を描かない。⁷⁾ それ故に、子供が死ぬ描写のある昔話は意図的に避けたものと考えられる。

なお、「ふしぎな子どもたち」の章に入っている「うりひめこ」では、主人公のうりひめこが殺害されている。しかし、結婚適齢期とされているため、すでにおとなになっていると坪田は見ていたと考えられる。

六、童話化にあたっての改変

『新百選』では童話化に伴いほとんどのものが原典からなにかしらの変更を施されている。その変更も単に言葉を現代風に直したのみで内容はほとんど変更のない物から、内容が改変されているものまで存在する。大幅に変更されたものは全体的に見れば少ない。

内容が変更されているものの中で注目したいのは原典では死ぬことになる登場人物を死ななくしている改変である。(表参照) 基本的に、登場人物の死も陰と見なしでできるだけ児童から遠ざけようと考えていたということが想定される。

しかし、表からわかるようにすべての死を改変したわけではなく、いくつかの特徴が見られる。

① 結末で死ぬことになる登場人物の死が改変されていることが

多い。

逆に言えば、話の途中で死ぬ登場人物の死（「うりひめこ」のうりひめこ、「カチカチ山」の婆など）は改変されない。

②悪人・敵役が死なないように改変されていることが多い。

意地悪な兄（「うたのじょうずなカメ」）や、ライバルの王、無理難題を押し付ける殿様など死亡してもあまり同情できない人物が生き残るよう改変され、逆にうりひめこや婆のように殺されるいわれのない人物はそのまま死亡している例が多い。なお原典では、悪人や敵役の死亡は大抵結末部であり、それ以外の死亡者は話の途中で死亡ということが関わっているのかもしれない。

③妖怪が退治される描写は改変しない

妖怪などの死は改変しないことがほとんどである。話の結末でも、原典通り退治されている。

怪談が少ない事と併せ、恐怖の対象を抹殺することで児童に安心感を与える目的があったのかもしれない。

以上が、『新百選』における死の改変である。また、これらより話の展開を原典から極力変えないように努めていた、ということも言えると思われる。死亡しないように改変されているのが結末部に集中しているのは、話の展開への影響を極力少なくするためと思われる。話の途中で死亡する人物が生き残るよう

改変されないのは、それによって話の展開に影響が想定されるからと考えられる。坪田は昔話本来の姿はできるだけ残しつつ、自身の童話理論に基づいて改変するという非常に微妙なバランス調整に苦心していたと見ることができのではないだろうか。これら以外にも以下のような特徴が見られる。

・文体の特徴

坪田は、昔話は本来語りということを重視していたことが先の引用からわかる。そのことから、『新百選』の文体も語りを意識した内容となっていることが多い。

（例一）

みなさんは、箕というものをこそんじですか？（「箕づくりと山姥」）

ところで、その白はどうなったでしょう。（「海の水はなぜからい」）

これで沢右衛門どんお幸運は、きょうのえものは、いったいいくらになったでしょう。みなさんひとつ数えてみてください。（「沢右衛門どんのウナギつり」）

しかし、お正月に近いころ、山へ行けば、きつと、このような穴の中で、今でもウサギが、おもちをついて、

「ころりん、ころりん、すつとんとん。」

といい声でうたっているかもしれないね。(おじいさんとウサギ)

引用にあるように、坪田は読者に対して語りかけるような文体を多用している。これは、昔話の語りという表現を大切にすると同時に、語りに慣れていない親が読み聞かせをした際に自然と語り口調になるよう工夫をしているためと考えられる。

・わかりやすさの重視

実際の昔話の語りよりもやや状況説明や描写が詳細であることが多い。やや冗長な印象も受ける。これは、児童が対象である以上、わかりやすさも重視した結果であると思われる。

また、外来語も使用することがある。

(例二)

なにぶん、鬼の水のみですから、まるでポンプを何十台と並べたようで、水はドゥッと、鬼の方へひきよせられました。

(「鬼の子小綱」)

四メートル、五メートルと登って、やっと、その人は大息をつきました。(「千びきオオカミ」)

このように、口承文芸としての本来の形よりも、現代の児童

が読んで理解しやすいかどうか、ということをも最重要視したと言えるのではないだろうか。

七、おわりにかえて

これまで見てきたように、坪田は本来の昔話としての形そのままを残すのではなく、あくまでも、現代の児童およびその保護者にわかりやすいもの受け入れやすいものとして再構成することを重視していた。これが語り継がれたものをそのまま残すことを重視する関敬吾のような研究者からよく思われなかった最大の理由と思われる。

しかし、坪田の童話化昔話作品は大幅な改変は案外少なく、文体も語りを意識したもので昔話としての雰囲気も大切にしているなど、原典ひいては昔話に対して一定の敬意を払っていることは間違いない。また、『集成』をよく調べるなど当時の最新の研究の成果も積極的に取り入れている。巖谷小波のように原点から大きく変化させる童話化昔話作品が多かった時代にあっては非常に良心的であると言える。

また、とくに『新百選』は百話という膨大な量の作品を収録し、様々な昔話に触れられるという利点がある。坪田以前によく読まれていた童話化昔話集でそこまで多くの話を収録したものはほとんどない。収録作品の数だけで見れば柳田国男の『日本昔話』の方が多いが、基本的に原典から大きな変更のない『日

本昔話』よりも『新百選』収録作品のほうが児童でも読みやすく書き直されているため、親しみやすいと言う利点があったものと思われる。現在、『日本昔話』は一般向けのものとして発行されることが多いのに対し、『新百選』（天抵、分割されている）は児童向けとして発行されることが多い。

このように、『新百選』は読みやすく、多くの昔話に触れることができ、さらに昔話本来の魅力も伝えることがある程度可能という、非常に優れた童話化昔話集であったと言える。そのため、関敬吾のように否定的に見るのではなく、現代における昔話の認識を形作るもののひとつとして評価するべきではないかと考える。

今後は、『新百選』以降の坪田の童話化昔話集についての考察、また弟子たちの童話化昔話作品についても坪田のものと比較研究してみたいと考えている。

注

- (1) 藤井倫明「現代における「瓜子姫」への認識—アンケート集 計結果により見えるもの—」『立正大学大学院日本語・日本文学研究』十四 二〇一〇四
- (2) 劉迎『「正太」の誕生—坪田譲治文学の原風景をさぐる—』二〇一五 吉備人出版
- (3) 大川悦生 一九三〇—一九九八。長野県出身の童話作家。早稲田大学文学部仏文科卒。在学中から早大童話会に属した。

坪田譲治の後輩にあたる。昔話の再構成作品にも力を注いだ。

- (4) 坪田譲治『新修児童文学論』一九六七 共文社
- (5) (4) 参照
- (6) 関敬吾『日本昔話集成第三部—笑話—』の発行は一九五七年八月で『新百選』と同じであり、参考にすることは不可能である。『日本昔話集成第三部—笑話—』の発行は一九七三年。
- (7) 時長由佳「坪田譲治論—小説との比較でみる童話の要素—」『清心語文』十三 二〇一一

参考文献

- 廣田隆志「坪田譲治の研究」『岐阜聖徳学園大学国語国文学』二十四 二〇〇五
- 前川康夫等著『国文学解釈と鑑賞』（特集坪田譲治・久保喬の世界）六十三巻四 一九九八
- 柳田国男『日本昔話名彙』一九五四 日本放送協会出版
- 山根知子「坪田譲治作品の舞台—東京・西池袋の自宅と「びわのみ文庫」」『ノートルダム清心女子大学紀要・外国語・外国文学編、文化学編、日本語・日本文学編』三十六巻一 二〇一一
- 山根知子「坪田譲治の金川中学校時代—金川中学校関係資料を中心に—」『ノートルダム清心女子大学紀要 外国語・外国文学編、文化学編、日本語・日本文学編』三十七巻一 二〇一三
- （ふじい・みちあき）立正大学文学部日本文学専攻
コース

表1 『新百選日本むかしばなし』 データ一覧

章タイトル	題名	初出	原典	日本昔話集成	採話地 (都道府県)
ふしぎな子どもたち	一寸法師	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『磐城昔話集』(1942.7)	○(誕生・一寸法師婿入型) ▲	福島
	竹の子童子	書下ろし	『昔話研究』1巻8号(1935.12)	◎(誕生)	熊本
	うりひめこ	書下ろし	『昔話研究』2巻第10号(1937.8)	◎(誕生・瓜子織姫)	秋田
	はなたれ小僧さま	書下ろし	『昔話研究』1巻創刊号(1935.1)	◎(異郷・竜宮童子)	新潟
	ヒョウタンから出た金七孫七	『日本童話集』(1954.8)	『江刺郡昔話』(1922.4)	◎(呪法・宝瓢)	岩手
	タニシ長者	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『聴耳草子』(1931.2)	○(誕生・田螺息子) ▲	岩手
	桃太郎	『鶴の恩がへし』(文庫版)(1952.7)	?	×(誕生・桃の子太郎) ▲	?
	三人の大力男	『日本童話集』(1954.8)	『聴耳草子』(1931.2)	○(誕生・力太郎)	岩手
	松の木の伊勢まいり	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『日本昔話(上)』(1930.4)	○(補遺・松の木の参宮) ▲	秋田
異郷ものがたり	天人子	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『聴耳草子』(1931.2)	○(婚姻異類女房・天人女房) ▲	岩手
	龍宮のおよめさん	書下ろし	『喜界島昔話集』(1943.1)	◎(婚姻異類女房・魚女房)	鹿児島(喜界島)
	龍宮の馬	書下ろし	『喜界島昔話集』(1943.1)	○(異郷・竜宮童子)	鹿児島(喜界島)
	大きなカニ	書下ろし	『日本昔話(上)』(1930.4)	×	島根
	灰なわ千たば	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『紫波郡昔話集』(1942.12)	○(婚姻難題婿・絵姿女房) ▲	岩手
	沼神の手紙	書下ろし	『江刺郡昔話』(1922.4)	○(異郷譚・沼神の手紙)	岩手
	かくれ里のはなし	書下ろし	『聴耳草子』(1931.2)	×	岩手
	龍宮の娘	『日本童話集』(1954.8)	『喜界島昔話集』(1943.1)	◎(婚姻異類女房・竜宮女房)	鹿児島(喜界島)
	龍宮と花売り	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『喜界島昔話集』(1943.1)	○(隣の爺・雁取爺) ▲	鹿児島(喜界島)
鬼と山姥と山の神と	初夢と鬼の話	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『磐城昔話集』(1942.7)	○(運命と致富・夢見小僧) ▲	福島
	鬼六のはなし	書下ろし	『聴耳草子』(1931.2)	○(愚かな動物・大工と鬼六)	岩手
	鬼の子小綱	書下ろし	『すねこたんばこ』(1943.9)	○(逃鼠譚・鬼の子小綱)	岩手
	山姥と小僧	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『加無波良夜譚』(1932.1)	○(逃鼠・三枚の護符) ▲	新潟
	箕づくりと山姥	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『聴耳草子』(1931.2)	○(愚かな動物・山姥と桶屋) ▲	岩手
	牛方と山姥	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『日本昔話(上)』(1930.4)	○(逃鼠譚・牛方山姥) ▲	新潟
	山の神のうつぼ	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『日本昔話(上)』(1930.4)	×	?
	山の神と子ども	書下ろし	『沖永良部島昔話』(1940.2)	○(運命と致富・山神と童子)	鹿児島(沖永良部島)
	松の木の下の老人	書下ろし	『喜界島昔話集』(1943.1)	○(運命と致富・子供の寿命)	鹿児島(喜界島)
	千びきのオオカミ	書下ろし	『甲斐昔話集』(1930.6)	○(愚かな動物・鍛冶屋の婆)	山梨
	狩人の話	『日本童話集』(1954.8)	『聴耳草子』(1931.2)	×	岩手
が兄弟もの	姉と弟	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『甌島昔話集』(1944.3)	○(兄弟譚・姉と弟) ▲	鹿児島
	海の水はなぜからい	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『老嫗夜譚』(1927.9)	○(呪法・塩吹臼) ▲	岩手

兄弟ものがたり	かしこくない兄と、悪がしこい弟	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『江刺郡昔話』(1922.4)	○(狡猾者譚・金ひり馬)▲	岩手
	米良の上ウルシ	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『日本昔話(上)』(1930.4)	×(兄弟譚・米良の上漆)▲	宮崎
	タニシ	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	?	×	
	歌のじょうずなカメ	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『加無波良夜譚』(1932.1)	○(大歳の客・大歳の亀)▲	新潟
	五郎とかけわん	『日本童話集』(1954.8)	『江刺郡昔話』(1922.4)	○(呪法・五郎の欠椀)	岩手
	仁王とが王	書下ろし	『日本昔話(上)』(1930.4)	×	鹿児島(喜界島)
	アラキ王とシドケ王の話	書下ろし	『喜界島昔話集』(1943.1)	○(巧智譚・仁王と賀王)	鹿児島(喜界島)
	ネズミとトビ	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『甌島昔話集』(1944.3)	△(逃鼠譚・旅人馬)▲	鹿児島
	馬になった男の話	書下ろし	『老嫗夜譚』(1927.9)	○(逃鼠譚・旅人馬)	岩手
となりのおじいさん	ウグイスのほけきょう	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『加無波良夜譚』(1932.1)	○(隣の爺・見るなの座敷)▲	新潟
	こぶとりじいさん	書下ろし	『すねこたんばこ』(1943.9)	○(隣の爺・瘤取爺)	東北
	サルとお地藏さま	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『旅と伝説・昔話特集号』(1934.12)	○(隣の爺・猿地藏)▲	東北
	ネズミの国	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『旅と伝説・昔話特集号』(1934.12)	○(隣の爺・鼠浄土)▲	秋田
	金をうむカメ	書下ろし	『壱岐島昔話集』(1935)	○(異郷譚・竜宮童子)	長崎
	灰まきじいさん	書下ろし	『日本昔話(上)』(1930.4)	○(隣の爺・雁取爺)	岩手
	天福地福	書下ろし	『二戸の昔話』(1937.12)	○(運命と致富)	岩手
	ものいうカメ	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『旅と伝説・昔話特集号』(1934.12)	○(大歳の客・大歳の亀)▲	大分
	だんご浄土	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『日本昔話(上)』(1930.4)	○(隣の爺・地藏浄土)▲	山形
	鳥をのんだおじいさん	書下ろし	『昔話研究』第2巻9月号(1936.9)	◎(隣の爺・鳥呑爺)	新潟
さずかった宝にげた宝	親切なおじいさん	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『老嫗夜譚』(1927.9)	×	岩手
	お地藏さま	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『聴耳草子』(1931.2)	×(大歳の客・笠地藏)▲	東北
	びんぼう神	書下し	『昔話研究』2巻第8号(1937.6)	○(大歳の客・貧乏神)	兵庫
	木仏長者	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『老嫗夜譚』(1927.9)	○(新話型・木仏と金仏)▲	岩手
	人が見たらカエルになれ	書下ろし	『甲斐昔話集』(1930.6)	◎(運命と致富・金は蛇)	山梨
	権兵衛とカモ	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『磐城昔話集』(1942.7)	○(誇張譚・鴨取権兵衛)▲	福島
	沢右衛門どんのウナギつり	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『昔話研究』1巻第2号(1935.6)	○(誇張譚・鴨取権兵衛)▲	熊本
	きき耳ずきん	書下ろし	『昔話研究』2巻7月号(1963.7)	◎(呪宝・聴耳)	鹿児島(奄美)
	かべのツル	書下ろし	『直入郡昔話集』(1943.12)	×	大分
	わらしべ長者	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『安芸国昔話集』(1934.10)	○(運命と致富・囊しべ長者)▲	広島
物たち恩をかえした動物	ネズミのすもう	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『聴耳草子』(1931.2)	×	秋田
	スズメのヒョウタン	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『加無波良夜譚』(1932.1)	○(隣の爺・腰折雀)▲	新潟
	おじいさんとウサギ	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『直入郡昔話集』(1943.12)	○(隣の爺・鼠浄土)▲	大分
	ネコのおかみさん	書下ろし	『聴耳草子』(1931.2)	◎(婚姻異類女房・猫女房)	岩手

動物たち 恩をかえした	サル正宗	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『日本昔話(上)』(1930.4)	×	静岡	
	サルとネコとネズミ	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『日本昔話(上)』(1930.4)	○(呪宝譚・犬と猫と指輪)▲	鳥取	
	ツルの恩返し	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『昔話研究』1巻第2号(1935.6)	○(婚姻異類女房・鶴女房)▲	鳥取	
キツネものがたり	むかしのキツネ	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『日本昔話(上)』(1930.4)		岡山	
	片目のおじいさん	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『日本昔話(上)』(1930.4)	○(人と狐・片目違い)▲	岩手	
	キツネとカワウソ	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『聴耳草子』(1931.2)	○(動物葛藤・尻尾の釣り)▲	岩手	
	モズとキツネ	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『昔話研究』1巻第2号(1935.6)	◎(動物葛藤・百舌と狐)▲	熊本	
	トラとキツネ	書下ろし	『昔話研究』1巻第11号(1936.3)	◎(動物競争・虎と狐)	広島	
	キツネとクマのはなし	書下ろし	『昔話研究』1巻第6号(1935.10)	◎(動物葛藤・狐と熊)	岡山	
	キツネとタヌキとウサギ	書下ろし	『甲斐昔話集』(1930.6)	◎(動物分配・狐と狸と兎)	山梨	
	キツネと小僧さん	書下ろし	『日本昔話(上)』(1930.4)	○(人と狐・似せ本尊)	山形	
	金剛院とキツネ	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『日本昔話(上)』(1930.4)	○(人と狐・金剛院と狐)▲	和歌山	
	キツネとタヌキ	書下ろし	『土佐昔話集』(1948)	◎(人と狐・狐の化け比べ)	高知	
動物ばかりの昔ばなし	かちかち山	書下ろし	『佐渡昔話集』(1939.7)	○(勝々山・勝々山)	新潟	
	カメに負けたウサギ	書下ろし	『加無波良夜譚』(1932.1)	◎(動物社会・亀に負けた兎)	新潟	
	サルとカワウソ	書下ろし	『昔ばなし』(1934)	◎(動物分配・猿と川獺の交換)	長野	
	ハチとアリの拾いもの	書下ろし	『羽後角館地方鳥虫草木の民俗学的資料』(1935)	◎(動物分配・蜂と蟻の魚分配)	秋田	
	ミンサザイ	『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『聴耳草子』(1931.2)	×(動物競争・みそざいは鳥の王)▲		
	ネコとネズミ	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『旅と伝説』14巻6号(1941.6)	○(動物競争・十二支の由来)▲	秋田	
	古屋のもり	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『聴耳草子』(1931.2)	○(古屋の漏・古屋の漏)▲	岩手	
	オオカミに助けられた犬の話	書下ろし	『老嫗夜譚』(1927.9)	○(猿蟹合戦・狼と犬と猫)	岩手	
	豆と炭とわら	書下ろし	『すねこたんばこ』(1943.9)	◎(動物社会・豆と炭と藁)	岩手	
	タカとエビとエイ	書下ろし	『直入郡昔話集』(1943.12)	×(巧智譚・大鳥と蝦)▲	鹿児島	
	カメとイノシシ	書下ろし	『昔ばなし』(1934)	◎(動物由来・猪と亀)	長野	
	クラゲ骨なし	『鶴の恩がへし』(1943.7)	『日本昔話(上)』(1930.4)	×(動物社会・猿の生肝)	?	
	とんちものと 知恵の助け	サルのおむこさん	書下ろし	『聴耳草子』(1931.2)	○(婚姻異類婿・猿婿入)	岩手
		天狗のヒョウタン	書下ろし	『聴耳草子』(1931.2)	○(誇張譚・何が怖い)▲	岩手
牛のよめ入り		書下ろし	『喜界島昔話集』(1943.1)	◎(婚姻難題譚・嫁の輿に牛)	鹿児島(喜界島)	
親捨て山		書下ろし	『甌島昔話集』(1944.3)	○(巧智譚・親棄山)	鹿児島	
頭にカキの木		『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『紫波郡昔話集』(1942.12)	○(愚人譚・額に柿の木)▲	岩手	
天狗のかくれみの		『歌のじょうずなカメ』(1947.11)	『昔話研究』1巻第3号(1935.7)	○(誇張譚・隠れ蓑)▲	熊本	
きつちよむさんの話(1)つば買い		書下ろし	『直入郡昔話集』(1943.12)	◎(狡猾者譚・底のない壺)	大分	
きつちよむさんの話(2)火事		書下ろし	『直入郡昔話集』(1943.12)	◎(狡猾者譚・火事の知らせ)▲	大分	

助け とんち もの と、 知恵 の	きつちよむさんの 話(3) ちゃくりか ぎす	書下ろし	『直入郡昔話集』(1943.12)	○(愚人譚・茶栗柿) ▲	大分
	きつちよむさんの 話(4) 水かめ買 い	書下ろし	『直入郡昔話集』(1943.12)	◎(狡猾者譚・瓶を買う) ▲	大分
	きつちよむさんの 話(5) まさかそん なことはあります まい	書下ろし	『直入郡昔話集』(1943.12)	◎(巧智譚・嘘の名人) ▲	大分

◎典型話 ○類話 ×無

▲初出時にこの話型を含む『集成』が発行されていなかったもの。

表2 『新百選』死亡の描写と改変

題名	死亡者	原典での死亡	『新百選』の描写
うりひめこ	うりひめこ	木から死亡。顔の皮を剥される	顔の皮を剥される描写はなし。
	あまのじゃく	カヤの根元で血が出るまで折檻する (死亡したかどうかは曖昧)	改変なし
三人の大力男	化け物	退治される。	改変なし
大きなカニ	カニの化け物	巨大なカニを斧を落として退治する	改変なし
灰なわ千たば	鬼	梵天王に鬼は退治される。	改変なし
龍宮の娘●	母親	衰弱死するが嫁の力で蘇生する。	改変なし
	難題を押し付け る殿様と家来	無理難題を押し付けた殿と家来たち は死ぬ。	懲りて、無理難題を言う事はなくなる。
龍宮と花売り●	竜宮の犬	兄に殺される。	改変なし
	意地悪な兄	天まで伸びた竹が天の糞袋を突き破り、 兄の一家は汚物に押しつぶされて死亡。	天のはきだめを貫いたため、兄の家はゴミに埋もれた。死亡したかどうかは不明。
山姥と小僧	山姥	山姥は井戸で溺死	改変なし
牛方と山姥	山姥	山姥の眠る唐櫃に熱湯を流し込んで倒す	改変なし
狩人の話	猿の化け物	狩人に退治される。	改変なし
海の水はなぜからい	意地悪な兄	海中に沈む。	改変なし
歌のじょうずなカメ●	歌うカメ	兄に殺される。	改変なし
	意地悪な兄	木から落ちて死ぬ。	木から落ちて大ケガをする。
アラキ王とシドケ王の話●	シドケ王	アラキ王に打ち取られる。	仲直りをして友達になる。
ネズミの国●	となりの爺	帰れなくなった隣の爺はそのまま死ぬ。	帰れなくなって困ったところで終わる。
金をうむカメ	金を生むカメ	カメが隣の爺に殺される	改変なし
灰まきじいさん	イヌ	となりの爺に殺される。	改変なし
片目のおじいさん	キツネ	狐汁にされる。	改変なし
キツネとカワウソ●	キツネ	人間に叩き殺される。	尻尾を切って逃げる。
キツネとクマのはなし●	キツネ	岩に頭をぶつけて死ぬ。	大ケガをする。
キツネと小僧さん●	キツネ	煮殺される。	キツネが謝ったところで終わり。
キツネとタヌキ●	キツネ	侍に首をはねられる	棒で殴られるのみ。
かちかち山	婆	タヌキに殺され、婆汁にされる。	婆汁の描写無し。
	タヌキ	ウサギに騙され海中に沈む。	改変なし
カメに負けたウサギ	オオカミ	オオカミはがけ下に落とされる	改変なし
豆と炭とわら	ワラと炭	ワラは焼け、炭と一緒に川に流される	改変なし
サルのおむこさん	サル	サルは川に落ちて流される	改変なし

*不思議な力を持っていたり、擬人化されていたりすれば動物も含める。

●=死なないように改変されている話